

なまこぼうと

福博ブライリぶら

十四日、大相撲は中日を迎えた。盛り上がる両国国技館。力士たちが化粧まわしをつけて上がる土俵。その土俵づくりに欠かせない道具が土俵グワだが、今は全国でただ一人、福岡市中央区清川三丁目目の鍛冶屋、大庭利男さん(66)が、高層マンションの下にある小さな町工場で作っている。

本人も「他人にはできないものを作りたい」と懇願。入門を許された。修業を重ね、どこにか少し光りが見えてきた後継者候補を工場に訪ねた。

打ち込む宮崎さんに、大将から指示が飛ぶ。手取り足取り教えはしない。「見て盗め」が基本だ。

博多包丁の切れ味は鋭い。出雲鋼の安来産の黄鉄はさびる。さび防止のコツは、使用後に熱湯をかけ、乾いたふきんで拭く。あるいは、磨き粉をつけた大根またはニンジンのへたですすり、お湯をかけて拭き上げる。切れ味が悪くなったら砥石で研ぐなど、こまめな手入れがポイントだ。

大庭さんが独立して五十二年、夢が一つある。二十年かけて作った、消えた農機具・土木工具である「窓グワ」「練りグワ」「片ツル」などのミニチュア五百種千五百点を図録に残す。

ビルの谷間の鍛冶屋さん

年六回の本場所、海外巡業にもお供する土俵グワ。ところが、その土俵グワをつくる業界は後継者難。鍛冶屋では食べていけないからだ。

三年前、高校を出たばかりの宮崎春生さん(31)長崎県五島市岐宿町出身が、大庭さん入門を請うた。主は、いったん断った。すると、両親が五島から

本人も「他人にはできないものを作りたい」と懇願。入門を許された。修業を重ね、どこにか少し光りが見えてきた後継者候補を工場に訪ねた。

「宮崎君、そんな叩きかたは、いかにはい。返しが悪かー」

看板の博多包丁づくりに使つと二十年はもつ。

鋼を使う。別名「一本包丁」。野菜切り、刺し身、サハをさばき、三角形の穂先でゴボウの皮むき。一本で万能のゆえの名称だ。

嫁入りする娘に持たせたのは昔。今は男性が自分の包丁を持ちたいと買いに来る。週三本売れると上々。同工場が作る博多包丁は一日三丁。七千五百円。上手

得には五年以上かかる。本体の鉄板に、熱した鋼を流し込むときにワラを溶かし込んだら温度が上がる。すると鋼が薄く広がり、切れ味が増す。この「焙烙流し」という独特の技術が必須だ。しかし土俵グワの年間売上高はわずか三十万円。包丁の売り上げを入れてもたかがしれている。日

宮崎さんの夢は「超一流の鍛冶屋さん」。その夢は「牛、馬を飼い、アイカモ農法を実践、自転車に乗って往診する」父親のライフスタイルと相似形だ。

父親の原点は「インドで修道女のマザー・テレサに出会ったこと」とも語る。「彼女に『きれいな目をしていいますね』と声を掛けら

れ、父は感激。施設『死を待つ人の家』を見て、今度は衝撃を受けたのです」

それ以来、宮崎親子は生活スタイルを変えた。「日本(人)はあまりに豊か。どこがおかしいのでは」と問い続けるなか、鍛冶屋の大將、大庭利男さんと出会

つたのだった。(地域報道センター・川上弘文)



ビルの谷間の鍛冶屋さん2人。大将の大庭利男さん(右)と弟子の宮崎春生さん

